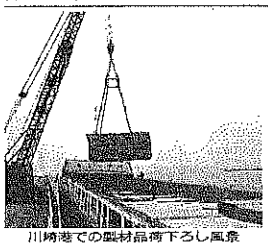
上棟を順延するケースが出てきている。一方、トイレなど住設機器の納材遅延により引き渡しが遅れ、次の着工がずれ込んでいる現場もある。

九州産杉梱包材を積載
第2船が入港
瀬崎林業

瀬崎林業(大阪市、瀬崎民治社長)が九州大手製材工場と連携して手掛ける梱包用杉製材品が、4月27日に川崎港に入港した。荷役は同日に終了。製材品は順次販売していく。同社の内航船による杉製材品入荷は昨年6月に続いて2船目となる。

今回入荷したのは、梱包用製材品約1300立方㍍と、建築用材約2000立方㍍の合計約1500立方㍍。梱包用製材品の割物と板物比率はほぼ半数ずつで、割物は取引先のニーズに合わせた品ぞろえとするため、売れ筋である85㍉シリーズを中心に前回よりサイズを絞った。板物は定番サイズを満遍なくそろえている。

一方、建築用材は又キ・胴縁が主体で、販売先が確定しており、荷役終了後は納品先へ配送される。


川崎港での製材品荷下ろし風景

首都圏近郊における同社の杉梱包材販売は定着してきており、過去1年に着目しても取引業者数・販売数量ともに堅調に増加している。梱包業者は納期や供給量の安定性に信頼を寄せている。

同社も販売において、強度を要する梱包には従来どおりチリ材を勧めるなど杉材とチリ材を適材適所に提案分けし、梱包業者のニーズに的確に応じている。

今回の内航船輸送で製材品は資材の梱包形態を改善し、荷役時の取り回しを効率化した。また製材品質は前回から定評があり、生産品目もニーズに合わせて臨機応変に対応できる体制が整っている。

同社は「製材後、スムーズに輸送・供給できるので変色などの心配もほとんどない」と産材梱包材のメリットを語る。

今後の製材品供給については、市況や国内情勢の安定化を見極めながら年間配船数の拡充も視野に入れる。

同社は引き続きチリ材を主軸としながら、杉のほか中国産LVLなど取り扱い品目の多様化を進めている。